

8. 新型コロナウイルス感染症と共に安心できる生き方を

介護老人保健施設 岸和田徳洲苑
介護福祉士 庄田平亜紀（しょうだひら あき）
共同発表者 高松早百合

はじめに

現在は徐々に落ち着きを見せつつある新型コロナウイルス感染症「以下、コロナという」ですが、第6波の際に当施設もクラスターが発生した。その後は大きなクラスターは起きなかったが、利用者・職員に発熱や感冒症状が出る度に戦々恐々とする日々が続いている。その中でいかに持ち込ませない。広げない対策を講じていったかをここに報告する。

経過

1. 当施設でも第6波の際にクラスターが発生した。最終的に利用者71名職員7名が感染し、感染者が増加する度、ゾーニングを行い、利用者の転室も同時に行った。
2. 利用者で発熱や症状があれば、PCR検査を行うと共に居室で過ごしてもらいカーテン隔離を行った。当施設の大部分は4人部屋でカーテン隔離していても同室者はいる状況である。
3. 職員は週2回の抗原検査を行い、利用者が入所される際にもPCR検査・抗原検査を行い、持ち込ませない対策を講じている。
4. 令和5年に、大阪府の補助金事業として、多床室の個室化改修工事を行った。

考察

1. 初めてのクラスターの際、状況は刻々と変化し、全てが手さぐりで対応する中での隔離場所の確保・転室など、コロナの感染に伴う発熱などの体調不良の利用者に対するケア以外の部分にも大きな労力を払う必要があり職員の負担も大きかった。
2. カーテン隔離はしているが、4人部屋の場合、接触や飛沫を完全に防ぐことは難しい。また、認知症の方もおり、マスクの着用を促しても外してしまう方も多く、同室者に対する感染対策に課題があった。しかし、迅速に居室でのカーテン隔離を行えていたので、施設全体としての感染拡大の防止には役立っていたと思われる。
3. 定期的な抗原検査と、入所時のPCR検査でコロナ陽性がわかることも多く、施設内への持ち込み防止に大いに役立った。また、コロナ発症から陽性判明までの期間が短くすむので、濃厚接触者の特定や検査・体調管理が容易であった。
4. 個室化改修工事に伴い転室などで利用者に不便を感じさせたが、多床室が個室化されたことで、カーテン隔離以上に発熱時などの隔離が容易になった。また同室者に対する感染拡大の懸念も大いに解消された。多床室の個室化に伴う不便な点としては、元の空間に対して、吊り下げ式スライド可能なパーテーションを入れるので、個々の空間が少し狭くなること。また、車椅子などで居室内を移動する際に間仕切りが当たってしまい、自由に移動しにくい可能性があることである。しかし、間仕切りは可動式であるので、職員の十分な配慮で事故なく経過できている。

まとめ

今回、個室化改修工事を行ったことで、隔離に対する負担が大きく減ったが、一番大切なことは感染症を持ち込ませないこと・広げないことである。今後も、標準予防策の徹底と、高齢者施設従事者であることを念頭に、適切なケアを行い、利用者の健康と生活を守る施設でありたい。